



村岸峯吉

(一八八二—一九七五)

揚水
水を上にあげること



日本最初の動力揚水建設 村岸峯吉

湖東平野の中ほどに豊郷町石畑地区があります。水源から遠くはなれたこの辺りでは、昔から水不足に苦しんできました。

明治四十二年（一九〇九年）、石畑一帯は、七月初めから八月末までの四十八日間、一つぶの雨も降らないという大日照りに見まわれました。田は一面にひび割れ、やっとのび始めたなえは、見る見る赤くかれていきました。たよりの野井戸も底をつき、人々はなすすべもなくただぼう然と立ちつくすばかりでした。

そんな村の姿に心を痛める一人の若者がいました。横浜から故郷の石畑に帰って区長になったばかりの村岸峯吉です。故郷の悲さんな状況ようを目の当たりにした峯吉の胸は、「何とかしてこの日照りの苦しみから村を救いたい。」という思いでいっぱいになりました。

峯吉は村の有志を集め、解決策を話し合いました。この辺りで手に入る水といえば地下水だけです。「揚水池をほり、蒸気ポン

プで地下水をくみ上げてはどうか。」という案が出ました。けれども、当時、そんな設備の例は、どこにもありません。揚水用の強力なポンプも、当時日本では作れませんでした。その上、かん心の地下水にしても、村中の田をうるおすだけの水量があるかどうか、全く分らないのです。実行するにはあまりにも不安なことばかりでした。しかし、「今年のような日照りは必ずまたやってくる。」と考えた峯吉らは、失敗したときは費用全額を自分たちで負担する覚悟で、動力揚水の建設を決断し、村の人たちに協力をうったえていきました。

計画を聞いた村の人たちからは、不安や反対の声が次々に出ました。

「そんな夢みたいなのが本当にできるだろうか。」

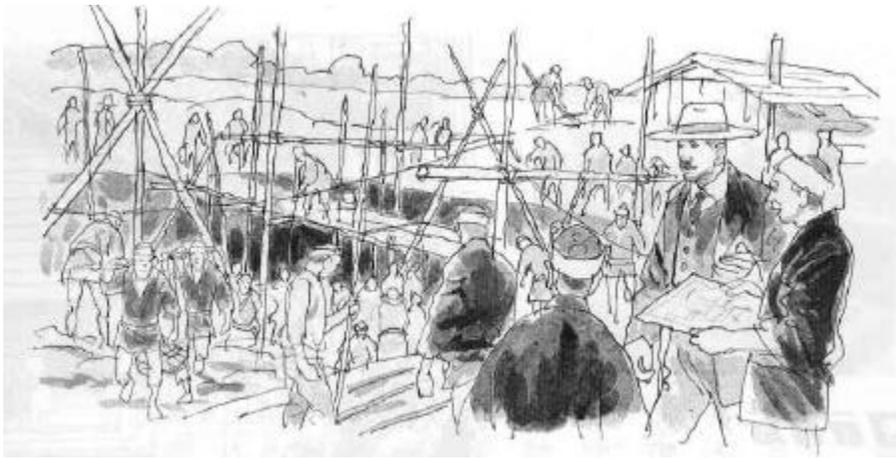
「大金をかけて、失敗したらどうするんだ。」

「先祖代々、何とかやってきたんだ。変な欲は出さぬことだ。」

そんな村の人たちに対し、峯吉はねばり強く説得を続けました。

「日照りのたびに泣くような暮らしを続けていては、村もさびれてしまいます。みなさん、明日の石畑のために立ち上がってください。」

誠意をこめて語る峯吉の姿に村の人たちも動かされ、ついにこの大事業に取り組むことになりました。うれしいことに、県も大賛成で、専門の技師



を送ってくれることになりました。

「何としても、来年の田植え時までには完成させよう。」と、十二月の初めに揚水池の工事が始まりました。しかし、いざほり始めてみると、期待したほどの水がわいてきません。日がたつにつれて、村の人たちに失望の色が広がり、あちこちで工事に対する不安や峯吉に対する悪口がささやかれ始めました。すでにこの工事につきこんだ費用は、予算額をはるかにこえています。村の有力者の一部では、工事をやめさせようと動くさえ出てきました。峯吉には、ねむれない日々が続きました。しかし、

「でなければ出るまでほるのだ。一つの池で足りなければ、二つでも三つでもほるのだ。」と、自分に言い聞かせ、齒を食いしばって工事の指揮を続けました。そして一ヶ月後、ついに水脈に達しました。水量試験の結果は上々で、村じゅうの田で利用するのに十分な水量があることが確かめられました。いつしかかげ口も消え、村じゅう総出で、夜もかがり火をたいて工事が進められました。一方、県の協力を得て、当時世界で最もすぐれているとされていたイギリス製ポンプを買い入れることも



できました。

工事に取りかかって半年後の六月四日、ついに試運転の日が来ました。村じゅうの人々が見守る中、ボイラーに火が入りました。やがてごう音とともに力強くポンプが動き出し、次のしゅん間、はい水管からどつと水が流れ出しました。……一分……二分……五分。池の水位は下がることなく満々と水をたたえ続けます。大成功です。人々はふき出す水のしぶきを浴びながら、たがいにだき合い、なみだを流して喜び合いました。そんな村人の姿をじっと見つめる峯吉の目にもなみだが光っていました。

こうして日本で最初の動力揚水が誕生したのです。

この動力揚水の成功は、全国に知られるところとなり、水不足に苦しむ各地の農村でも続々と建設されていったのでした。

完成時の揚水池



考えよう

工事がうまくいかず、悪口や反対の声でねむれぬ日々が続いたとき、峯吉はどんなことを思ったでしょう。自分で目標を立て、最後までやりとげたことはありますか。その時の気持ちはどうでしたか。